

令和7年「角館のお祭り」曳山 外題・場面解説

	外題	登場人物	作者	解 説
岩瀬若者一同	義勇 関ヶ原 松尾山の間	大谷刑部吉継 小早川金吾秀秋	広目屋	石田三成率いる西軍と徳川家康率いる東軍が関ヶ原の地で激突する。莫逆の友である三成から共に戦って欲しいと懇願された吉継。無謀な戦いであると説くが、三成の堅い覚悟を知る。病身のため立つことがままならない吉継であったが、「義」を貫き通し友のために命をかけて出陣する。戦いの最中、東軍へ寝返った秀秋は松尾山より、吉継軍へ攻撃を仕掛けるがこれを予期していた吉継は持ち前の知略を発揮し、善戦する。天下分け目と名高いこの戦にて吉継は力の限りを尽くし、采を振るうのであった。
西部若者	鬼小島弥太郎 釣鐘奪還	鬼小島弥太郎 西法院赤坊主	文 伶	長尾虎千代は、幼少期に春日山林泉寺で出家しのちに上杉謙信となった。この林泉寺の釣鐘を奪い取られた。この釣鐘を奪ったのが越後に伝わる妖怪西法院赤坊主であった。赤坊主はその他にも悪行を行っていた。これを懲らしめるべく上杉謙信は、側近の家来である強力無双の豪傑で「鬼小島」とも呼ばれる小島弥太郎に釣鐘の奪還し退治を命じる。弥太郎は、単身林泉寺に向かい死闘の末に赤坊主を退治し釣鐘を奪還したのであった。のちに鬼小島弥太郎の武勇伝となった。
駅前若者	南総里見八犬伝 芳流閣の間	犬飼現八 犬塚信乃	薦谷流 駅前若者	安房の里見家の危機を救うため伏姫の死後「仁」「義」「礼」「智」「忠」「信」「孝」「悌」の珠を持つ八犬士が活躍する物語で、互いに八犬士に連なる者であることを知らずに高楼の上で敵の間者（犬塚信乃）と捕り手（犬飼現八）として相戦う場面
菅沢丁内若者	三方ヶ原の戦い	武田信玄 本多忠真	菅沢丁内若者	元亀 3 年（1572 年）、名将・武田信玄は西上作戦を開始し、徳川家康の領地・遠江に進軍。精強な軍勢で徳川・織田連合軍を圧倒した。三方ヶ原の戦いでは、信玄が巧みな戦術と騎馬軍団を駆使し、家康軍を打ち破る。その中で徳川軍家臣・本多忠真は奮戦し、家康の退却を助けて討死した。信玄はこの戦で武勇と知略を示した。戦国最強の名にふさわしいものとした。
本町通り	天保水滸伝 大利根河原の決闘	平手造酒 飯岡助五郎	広目屋	村の富豪・相撲の元祖である笹川繁蔵が勢力を増す頃。下総一帯に勢力を持っていた飯岡助五郎は土地を奪われ、危機感を持ち始めた。双方の子分どもが衝突し始め、ついに大利根河原で決闘が起きる。笹川の用心棒・平手造酒は大恩ある笹川に命を捧げようと全身紅く染め、報を接した。そのお陰も有り笹川優勢で勝敗は決した。総勢数百人という侠客が争うまさに大時代の様相を帯びた決闘であった。
駅通り若者	義経千本桜 蔵王堂花矢倉の間	佐藤忠信 能登守教経	広目屋	主家を滅亡に導いた源氏の打倒を目論み、僧兵横川寛範として身を潜める能登守教経。一方、先の戦で教経の放った矢により兄を失った佐藤忠信。互いを仇とする両者が吉野蔵王堂にて対峙する。忠信により追い詰められた教経であったが、間に入った源義経のはからいにより、平家の血を引く安德帝が出家をし、母である建礼門院のもとに身を寄せることを告げられ、義経千本桜は大団円を迎える。
西勝楽町若者	壇ノ浦兜軍記 景清の牢破り	悪七兵衛景清	文 峰	壇ノ浦の合戦で平家は滅亡した。源頼朝の命を密かに狙っていた平家の武将 悪七兵衛景清は土牢に捕らえられ押し込められている。源頼朝の家来である岩永左衛門と秩父重忠は、平家が隠したとされる宝物「青山の琵琶」と「青葉の笛」の在り処を景清に尋ねるが、口を割ろうとしない。そこで景清の妻である阿古屋と娘の人丸を連れて来て、琴や胡弓を演奏させて宝物の在り処を探ろうとする。しかし、これに激怒した景清は、柱を壊して牢を破って脱出し阿古屋と娘を連れて逃げる。岩永は追いかけようするが秩父は頼朝から三度までは見逃せと指示されているため岩永を留め、景清と戦場での再会を約束して別れるのであった。
桜美町若者	甲陽軍鑑 川中島の合戦	武田信玄 上杉謙信	薦谷流 桜雅会	甲陽軍鑑は戦国時代、軍事・戦略武田家の様子を記したとされる。一五六一年九月一〇日、妻女山にいる上杉軍を武田の別動隊が背後を突いて八幡原で待伏せする啄木鳥戦法をした武田軍だが、上杉軍は奇襲を見抜き夜中に妻女山を下山する。朝霧に紛れ八幡原へ先に到着した上杉軍は車懸の陣形で突撃。武田軍は鶴翼陣形で応戦し、その中で上杉謙信が陣幕へ突入し武田信玄と一騎打ちしたとされる。その後武田別動隊が反撃し両者は激戦。両雄引分けで戦いが終わった。
七日町丁内	前九年の役 厨川の戦い	源頼義 藤原経清	小 松	平安時代後期、安倍氏は陸奥国を支配し、朝廷に反抗的な態度をとっていた為、朝廷は源頼義を陸奥守に任命し安倍氏討伐を命じました。前九年の役における厨川の戦いは源頼義・源義家率いる朝廷軍と、安倍貞任を総大将とする安倍氏との間で繰り広げられた最終決戦であり、安倍氏の拠点である厨川柵が陥落し、安倍氏滅亡の決定的な要因となる。朝廷側から寝返った藤原経清は、頼義に苦しみを長引かせる為錆びた刀で斬首され、経清に対する頼義の恨みは相当に深かったと言われています。
中央通り	鐙引	悪七兵衛景清 三保谷四郎国俊	広目屋	摩耶山の谷で景清と三保谷が出会う。その山中の観世音に幼い安徳天皇の病氣平癒祈願に代参した伏屋姫が持つ長刀と名鏡を、木鼠次段太が奪おうとして、誤って谷底に落とす。この二品を景清と三保谷が奪い合い、三保谷の鐙を引き合うはずみに鐙はちぎれ、長刀は折れ、宝鏡は三保谷の手に落ちる。景清と三保谷が兜の鐙を引き合い、首の強さよ、腕の強さよと感嘆しあったという古い伝説を再現した物語である。
横町若者	保元の乱	鎮西八郎為朝 大庭 景義	横町若者	自ら鎮西八郎と名乗り、その剛勇さで九州地方で勢力を得た藤原為朝は、父為義とともに保元の乱で崇徳天皇方に参加する。深夜、西門に攻めてきた大庭景義に対し、為朝は鎧矢を放ち左下を砕く。後に「吾朝無双の弓矢の達者也」といわれる所以となった出来事である。最終的には相手方の後白河天皇が勝利するが、武士の台頭を促す重要な転換点となる戦いであった。
山根谷地町旭会若者	絵本太功記十段目 尼ヶ崎閑居の段	武智十兵衛光秀 佐藤虎之助正清	広目屋	武智光秀は本能寺で主君、小田春永に夜討ちをかける。これを聞いた真柴久吉は備中の毛利勢と和睦を結び、急ぎ光秀討伐へ動く。舞台は光秀の母、皐月の住む尼ヶ崎の閑居。皐月は出陣する孫の十次郎と許嫁の初菊に祝言の杯をさせる。そこへ旅僧に化けた久吉が現れる。光秀は久吉を狙って竹槍を突き刺すが身代わりとなったのは皐月だった。戦場から帰った十次郎は絶命し、皐月も歿する。進退窮まる光秀、そこへ久吉と佐藤正清が現れ天王山での再会を約束するのであった。
北部丁内若者	積恋雪閑屏	大伴黒主 小野小町姫	北部丁内若者	一面の雪に閉ざされた逢坂山（おうさかやま）の閑はなぜか桜が満開。しかも樹齢三百年にあまる桜の花は薄墨色。先帝の忠臣と、怪しい閑守の男が閑を守っていると、美しい小町姫が通りかかる。そのあと、傾城に姿を変えた桜の精も姿を見せる。四人が繰り広げるのは、王朝の政争を背景にした幻想的な恋と謀反の争いだった。
上新町若者	大江山酒呑童子	酒呑童子 平井保昌	薦谷流 上新町若者	夜な夜な都に現れて女をさらうという大江山の鬼神を退治するため、源頼光は平井保昌と四天王を従えて、山伏姿に身を変えて大江山へと向かいます。やがて童子の姿で忽然と現れた酒呑童子は、勧められる酒が毒酒とも知らずに盃を重ね、舞を披露。酩酊した童子が奥の寝所へ引っ込むと、酒呑童子にさらわれた濯ぎ女たちが現れ、頼光一行を寝所へ案内。そこには鬼神の本性を現した酒呑童子が…。酒を好む酒呑童子が酔態しながら舞う愛らしい姿から一転、恐ろしい形相での激しい立廻りまで、洒脱で豪快な舞台。
下岩瀬町若者	川中島の合戦 八幡原の一騎打ち	武田晴信 上杉政虎	廿町如月会	甲斐国の武田晴信が信濃国に侵攻して各地を制圧し、さらに北信濃に侵攻したことで越後の上杉政虎と軍事的に対立した。武田晴信と上杉政虎の対立は、北信濃の覇権を巡る戦いとなった。第四次の戦は川中島の八幡原が、最大の激戦地になった。乱戦の最中、上杉政虎が手薄となった武田晴信の本陣に斬り込みをかけた。政虎は床几に座る晴信に三太刀にわたり斬りつけた。武田晴信は床几から立ち上がると軍配をもってこれを受けた。
東部若者	茨木 綱館の間	茨木童子 渡辺綱	薦谷流 東部若者	源頼光の四天王の一人である渡辺綱は羅生門で悪鬼の片腕を切り落とした。時の陰陽師、安倍晴明に七日間の謹慎（物忌）をしたほうがいいと助言される。助言どおりに謹慎していた七日目、綱の館に叔母・真柴が訪れる。綱は叔母の懇願に負けていつけを破り館に入れてしまう。封印していた鬼の片腕を叔母に見せたところ叔母に化けていた茨木童子が本性を現す。戦いの末、茨木童子はついに腕を取り返し闇に消えていくのであった。
大塚若者	元禄忠臣蔵 御浜御殿綱豊卿	富森助右衛門 徳川綱豊卿	大塚若者	時は松の廊下事件の1年後。舞台は甲府藩徳川綱豊卿の別邸、御浜御殿。次期将軍とも目されている徳川綱豊は、浅野家の再興と赤穂浪士の仇討ちどちらが儀になっっているのだろうかとう悩んでいた。そこへ赤穂浪士の富森助右衛門がやってくる。浪士たちの真意はどこにあるのか。二人の対面、探り合い、心のふれあい、緊張感の中にも記憶の中にもとどまる美しさがある場面である。
川原町若者	北の関ヶ原 慶長出羽合戦	直江兼続 最上義光	広目屋	慶長5年(1600年)上杉軍の智将・直江兼続が、出羽へ進軍。狙われたのは、東軍の要・最上義光。死闘の舞台は、最上家存続をかけた不落の長谷堂城。慶長出羽合戦は、単なる地方戦ではない。「北の関ヶ原」とも呼ばれる程、関ヶ原の戦いの勝敗にも影響を与えた、もう一つの天下分け目の戦いだったのだ。